

# これからの学生支援のあり方を求めて —学生気質の変遷と厚生補導業務の提案—

松 本 和 俊

(文教大学湘南校舎事務局教育支援課)

## One Consideration of the Ideal Method of the Student Support in the Future : The Suggestion of the Change of the Student Temperament and "Student Personnel Services" Duties

MATSUMOTO KAZUTOSHI

(Education Support Division, Shonan Campus, Bunkyo University)

### 要 旨

文教大学がこれからより一層「学生中心の大学」を実現していくために、よりよい学生支援組織を提案する研究成果報告書。青年心理学の理解から始まり、大学紛争、「Student Personnel Services」(厚生補導)を辿り、新たな学生支援のあり方と組織機能を提案する。日本初の大学アドミニストレーション専門課程大学院の1期生として越谷校舎学生課時代に執筆・発表による(桜美林大学大学院国際学研究科大学アドミニストレーション専攻)。

### 序 章 研究の動機と目的

大学というところ、学生というお客さまがいて、大学から「知識」「経験」等を受け取り、付加価値を身に付け巣立っていく。筆者が管理部門に在籍していた時に感じた職員の「職員としての意識」と「業務内容の認識」、業務遂行に対する「モチベーション」、これらすべての欠如またはレベルの低さに原因があるだろうと感じた。まず内容の問題としては、価値あるものを適切に供給できているか、また内容に遜色はないか。次に提供者と受給者との間に信頼関係や立場が用意または醸成されているのか。そのように自省するとともに自問したとき、主体性や中心を学生に合わせ、自由にその主体者の位置・レベルに合わせたサービスを的確に供給するようなサポート体制が望ましいのではないかと考えた。

その中で、文教大学がこれからより一層

「学生中心の大学」に近づき、実現していくために学生支援組織の提案を進めていく。

厚生補導の根幹であるStudent Personnel Services(第3章にて説明)が大学の組織改編や合理化、業務リストラのために、その業務自体を変質させられていった可能性は否めない。だからこそ、再び学生を見、認知して、その対応を考えるべきだろう。細分化された業務を再結集させ完成すべきだが、一度分割され散逸した業務をまとめあげることは、かなりのエネルギーと知恵が必要だと考える。そのために、過渡的にニッチの業務を整理し拾い集め、再び総体的な厚生補導部署を念頭に組織を考えるべきだと考える。

### 第1章 大学生の心理—青年心理学的見地から—

#### 1. 1 お客さまを知る 青年を知る

日本においても高等教育への進学率が向上するにしたがい、ユニバーサル段階に近づき、学問的専門職業人や高度な教養人の養成という役割を担えなくなると言われている。それは、熾烈な受験戦争に対応するために中等教育課程が本来行うべき教育の先送りを、もろに被った大学が補填する形で役割を担わされていると目されている。また、大学に進学した青年たち自身も、さまざまな影響を受けて変化をしているに違いない。その影響とは、社会情勢や生活環境、前述の大学入学までの教育内容の変化などさまざまで、一口では言い表せない。

入学してきたばかりの18歳から卒業までの4年間を、間近で見させていただいている筆者の目にも、この期間がいかに重要で替えがたいか実感として感じている。そして、レベルの高低はさておき、できる限りの対応に手間を掛けたいと心掛けている。しかしながら、人生にとって重要な期間を過ごす大学、大切な青年時代を預かる立場にある大学職員として、果たしてその対象でお客さまである青年・学生の特性や実態を把握しているのかという素朴で、核心をついた自問が浮かんできた。今更ではあるが、本来もっと「青年」の特性やその心理の勉強が必要であると考えられるのである。

### 1. 2 青年の反抗とはどんなものなのか

気分の変化、たびたびの興奮、たえまない精神の動揺が子どもをほとんど手におえなくする。まえには素直に従っていた人の声も子どもには聞こえなくなる。それは熱病にかかったライオンのようなものだ。子どもは指導者をもとめず、指導されることを欲しくなくなる。(熱病にかかったライオン「エミール」)

筆者がかのルソーの名著「エミール」の「熱病にかかったライオン」を知ったころの「反抗期」については、兎に角厄介なものではあるが、その時期のない人はその後の人格形成に支障を来すという、必要不可欠なもの

程度の認識だった。しかし、この反抗とは心理的離乳 (psychological weaning) という親離れをするための一つの所作である。心理的離乳は、第1次心理的離乳・第2次心理的離乳の二つの段階をもつ。第1次は内面の葛藤を投げ出そうと専ら両親に反抗する時期、第2次はしだいに安定化し、相手の立場にも配慮しながら、同一化と異質視を混じえ、人格的関係性を再構成する(親子関係を改善させ、自信や自己受容を生み、好循環がみられる) 時期とに大別される。まさしくこれらは青年にとって、児童期的なものすべてを否定し、成人期的なものすべてを吸収するという心の動きである。前者は否定・破壊・離反の側から、後者は肯定・建設・相互性の側から、児童期の親子関係を変え、克服していく発達過程であり、青年期は前者に始まり後者に終わる。

### 1. 3 変化する青年?

西平(2000)は青年の特性を、「かつて青年は、内向的で、恥ずかしがり、センチメンタルで、ロマンチックで、反抗的で、とまとめられていた。しかしこれらの諸特性は青年に限らず、被抑圧民族も、また(男性に比べて)女性も顕著であり、そしてそれらの人々は、社会の中で『特権のすくない集団』に属することがわかってきた。」と述べている。「『青年だから……である』と言うより、正しくは、『特権の少ない集団に属するから……である』と言い直すべきであろう。そしてその証拠に社会が豊かになり、民主的になればなるほど、これらの人々は、特権を与えられるようになり、解放され、……特性は徐々に弱まってきているのである」と続けている。表面的な社会的適応が優先して、青年独自の内向化・反抗性・情熱性・個性的表現欲が消え、適応性の高い、妥当的な「やさしい」態度・行動が強まる。今後世代間の境界に「希薄化現象」がさらに進み、子ども・青年・成人・老人の発達段階間の格差は、ますます薄

れていくと思われる。すべての境界がはっきりしなくなり、差が消え、特色が曖昧になっていく。豊かな社会・少子化社会では、青年の社会的特権性が強まり、今までの「特権の少ない集団」としての青年らしさが薄れつつあるようである。つまり、以前の禁欲的で抑圧された環境に置かれた青年と、欲するものが満たされる社会に育つ青年では、やはり変わってしまったと言えるのかもしれない。この豊かな社会・少子化社会が、子どもたち・青年たちの育て方を変えてしまったとはいえる。その結果として、確かに青年たちは変わったかもしれない。ただ、それは本質的変化でなく、作用的結果的変化である。

田口（1987）は、「論理学」のテストの時間に解答用紙に落書きを勧め、それらを年代順・世代毎に整理して出版している。戦後から高度経済成長期までの学生の落書きを見て、「同じ日本人の青春とは思えないほど」の大きな違いに驚かされるが、当然ながら「戦後日本の社会の大きな変動」が大いに影響を与えていることに触れている。同じ種類の植物の鉢植えを全く違った環境で育てれば、当然発育に変化があるのは当然で、違う環境で育てた鉢植えが皆同じ発育をすれば、初めから苗の品種が違っていたと考えるほかはない、という。同じ品種を違った環境で育てたら、その生育状況や完成形は全く違った個体になるだろう。「宇宙人」のように不可解だといわれる現在の若者たちを育てたのは、今日の日本社会であり、その社会をつくったのは「おとな」たちなのだ。田口は、若者たちに対して、愛情を込めて「同じ日本人」と呼ぶ。変わったのは、「社会」なのだ。そして、彼らを批判することは、その社会を創造した「おとな」たち自分たちの全責任だと訴えている。

つまり、以前の禁欲的で抑圧された環境に置かれた青年と、欲するものが満たされる社会に育つ青年では、当然変わって見えると言

えるだろう。エリート段階での大学には、既にこの時期を過ごした青年が人間形成や最終的な人格の完成の時期を過ごすべく、最高学府に集ったことだろう。しかしながら、現在は多様化の時代と呼ばれる。大学で青年が身に付けるもの・欲するものは、さまざまでその目的もまちまちだと考えるべきなのかもしれない。学生の欲するものを全て用意することは大変なことかもしれないが、それぞれの大学が求められる機能をきちんと認識し、求められた機能を用意するのもまた新たな大学の形なのかもしれない。

大学の学生課に勤務する筆者に対して、大学時代の友人は異口同音に「今の学生（若い）って、どうよ？」という。「おいおい、俺たちも昔『新人類』っていわれたことを忘れたのかい。」すっかり「おとな」になって、若者たちを傍観する番が回ってきたような気がする、今日この頃ではある。

## 第2章 大学生気質の変遷—「大学紛争」期を中心に—

青年心理学の見地では、「青年性」とは人類全体がもつ相対的に変わらない普遍性を示し（必然性に帰属する）、「世代性」とはある特定の時代、一定の地域社会で青年性が変容されて現れたもの、ある集団において共通に現れる類型的な（偶然性に帰属する）ものであるとする。

1980年代の青年を「新人類」とか「エイリアン」とよんで、理解できない心情のもち主とみなした。確かに従来から青年心理学で捉えられてきた青年性は薄れ、児童性と成人性とが入り交じった奇妙な心理特性群が顕わになり、成人をとまどわせたのである。この時期にこのような現象が起きたのは、全く別の文化になってしまうほどのハイテクノロジーがより豊かな社会をもたらせたために様相を一変させてしまったといわれている。青年の性的行動・余暇活動・学生運動・逸脱行為など

すべてについて、そこに短絡的で、エネルギーが豊富で、視野の狭さなど、如何にも青年的なもの・青年性と、権威を問題にせず、遊び気分の、無感動な、現代の若者だけに顕著な世代性が指摘できる。この後者の時代的世代的な要因が強すぎて、青年性を変質させてしまうほどの世代性で前述の「新人類」や「エイリアン」を生み出したのだ。

## 2. 1 大学紛争とは？ 時代の世代性から見て

小谷(1998)は、その著書「若者たちの変貌」の中で、「学生反乱とは何だったのか？」という問いに対して、25の命題を掲げて論を展開している。

「学生たちは、大衆化という現実に対応できない遅れた大学のあり方に不満を爆発させた。」この経済成長の時期に、大学進学率は急激に上昇し、なおかつベビーブーマーたち(団塊の世代)の大学進学率の時期とも重なり、大学は急激な膨張を遂げていく。膨らみすぎた大学は機能不全に陥ると同時に、「大衆化」という現実に対応しきれない「遅れた」大学の姿を浮き彫りにされた。学生の主訴は、というと学費の値上げ問題や学生の処分に関わるもの、学生の権利(寮や会館の管理問題)など大学の民主化を求めるものがほとんどだった。大学の圧政への自由のための闘争だったのかもしれない。

「学生反乱は、ベビーブーマーと先行世代との世代間闘争である。」親たちは戦争により辛酸をなめ尽くした世代であった。「欠乏の時代」に過ごした親たちは、物質的な豊かさを至上と考え、自分たちが成し遂げた経済的繁栄の成果に満足していた。その「豊かさの世代」に身を置く青年たちが反発した。

「若者たちの父は、第二次世界大戦によって、決定的に権威を失墜させていた。学生反乱は、『父親なき社会』に対する、若者たちの苛立ちの表明である。」大学教授たちが学生たちの憎悪的となったのは、彼らが専門

的知識で武装し、学問と世俗の権威を身にまとい、偽善的な大人の代表であると同時に「学歴社会」の勝利者であったことが挙げられるだろう。そして、その姿は学生たちの「父」と重なりあうものだったと思われる。

## 2. 2 「自己否定」とアイデンティティ・クライシス

全共闘運動のスローガンとなったのが、「大学解体」、「自己否定」であった。青年の課題としてのアイデンティティ確立とは、親の世代から受け継いだ同一視と価値意識を清算して、若者が自らの自己像と価値観とを築いていく過程である。このプロセスで、青年は「自己否定」への強い欲求を抱くものである。そして、この全共闘運動の場合、否定の対象となるのは、彼らの「内なる両親」であったと小谷は言う。自己否定への欲求も、親の世代の支配からの逃走も、一般的に青年たちにとってはノーマルなものである。しかし彼らは、親から受け継いだ価値意識のすべてを破棄して、ゼロからアイデンティティ形成をやりとげる必要性を感じていた。歴史的遺産から全く切れた無の地点から、自己を築いていかなければならない。先行世代との厳しい「断絶」の認識が、彼らの「自己否定」への欲求を際限のないものにしていった。そして、その結果引き起こされるアイデンティティ・クライシスもそれだけ深刻なものとなっていった。彼らのアイデンティティは度重なる「自己否定」の結果、無に帰っていた。そして、ヘルメットにゲバ棒、そして「顔をもたない」という象徴の覆面というスタイルも学生たちの直面していたアイデンティティ・クライシスの深刻さという観点から説明できる。スローガンによって自らを否定した彼らは、他者に対しても容易に攻撃的になることができた。そして、次第に過激化していった。

## 2. 3 大学紛争の残したもの

「大学紛争」「学生運動」の結果として、大学の管理自体は改革の道を進み始め、紛争

自体は終息していった。臨時大学立法によって、大学は一定範囲内の「学生参加」を認めるようになる。その後は、この波は大学から離れ、セクト化し、過激化してくる。学生は、政治的にも体験的にも失望し活動から離れていく。当時の好景気もあり、「ゲバ棒を振ったくらいの奴の方が見所がある。」と企業の人事担当者がよく口にしていたようで、何もなかったかのように団塊の世代の若者たちは企業に吸収され、人事担当者の期待を裏切ることなく「モーレッツ社員」にそして「企業戦士」となり、日本の大企業体制の発展に貢献した。1968年に紛争が激化したためにいわれた「六八世代」までの学生たちの身に「自覚なき大量転向」が生じたといわれている。小此木（1978）は「プロメテウスの人間」とその姿を説明している。経済が好調で、彼らに対する寛容な風潮のために活動歴は傷にならず、逆にツブシになっていたほどだった。荒井由美の『いちご白書』をもう一度の歌詞もその時代を如実に表現している。

ちょうど高木（1985）は、「学生運動」の下火の原因を、学生たちの“政治離れ”と“経済状況悪化”にあるとしている。学生の大衆化はあまりに加速しすぎて、学生の特権的性格を低下させ、意識の多様化を生み、その共同体意識、社会・政治への関心、一致した行動性を失わせたといっている。また、当時の学生の特性については“シゾイド（分裂的）人間”が増えたともいっているが、不況が深刻になりいい職に就くためには「学生運動」どころではなくなったことを挙げている。1973年第4次中東戦争が勃発し、オイルショックが日本を襲い、GNPの伸び率がマイナスに転じ、高度経済成長期が終焉するとともに、学生反乱も同様の道を選んだ。

「大学紛争」は日本の青年期を大きく曲げてしまった事件といえるのではないだろうか。大学は権威の象徴であり、青年期における乗り越えるべき父親の象徴でもあった。1970年

代以降の青年たちの発達や心理的発育に支障を来す事件であったのかもしれない。大学の大衆化、そして大衆化して増加した大学生に特権を与え、豊かな温床を敷設するきっかけとなったと考えれば責任は重大である。

## 2. 4 その後に来た者たち

1970年代後半、「シラケ」が来る。そして、「三無主義（無責任・無気力・無関心）」「五無主義（三無＋無感動・無作法）」へと発展していった。学生運動が活発な時期でも、片方では社会への無関心、自己への無力感と両極端な青年たちが特徴的な時代ではあった。そして、学生運動が下火となり、「シラケ」がより顕著となっていった。

高学歴化を迎え、社会に出ていく時期が遅くなってきた。つまり、モラトリアム期が長引くにつれて、「おとな」にならずにモラトリアム状態にいつまでも居続けようとする青年が増加していった。「永遠の少年」である。筆者の学生時代に流行ったダン・カイリーの「ピーターパン・シンドローム」のピーターパンが増えてきた。モラトリアム期が延長されれば、その分青年たちも身体も成熟の頂点に達して、官能的なものが他のものを押し退けるのも当然である。家庭では、父親が会社で忙しく「父親不在」となる。社会や人生の厳しさを教える役割の父親が不在となることで、母子関係が最優先されて、感覚的人間となり、「子どもっぽさ」を示すようになってくる。

ちょうど1980年を迎えるころ、60年代出生組が大学進学を迎えた。浅田彰の難解なハードカバーが飛ぶように売れ、筆者の世代は「新人類」などといわれて、他にいい事をいわれた覚えがない。中森明夫が「おたく」という言葉を使い、そんな青年たちが溢れた時代だった。経済は70年の不況を乗り切り、80年代は上昇に転じ、バブル景気となり91年には就職率81.3%まで戻している。

## 2. 5 学生運動のなかった大学

本来青年期の最も主要な発達課題は、成人になることである。成人になることはそう容易いことではないことも相まって、現代では成熟することを拒否する青年が増えている。青年の成熟拒否に対しては、まず社会全体が謙虚に反省することから出発しなければならない。両親の甘やかし、不明瞭な躰方針、子どもにとって尊敬できない生活態度、とりわけ夫婦間の愛情の希薄さなど、世代継承の基礎条件である信頼と尊敬が育たない家庭が多い。しかし、「すべては親の責任」とみなす青年を了承することもできない。人生において、運命的な必然性に対して、「それでもわたしは」とはね返す自覚と気力を与えられているのが青年期だからである。そんな仕掛けを大学コミュニティの中で造成させるのは夢物語かもしれない。ただ、筆者はこの文教大学に恩返しをしたくて、自分の後輩たちにそんな仕掛けのある大学を提供する提案を続ける。

## 第3章 大学厚生補導の本質

### 3. 1 厚生補導の精神

大学における厚生補導とは、Student Personnel Services（以下、SPSと称す）の意識である。その理念は、学問的な知識より宗教的な魂の救済に重点が置かれ、学生の個人的な生活についても立ち入った指導をする傾向にあった。アメリカの植民の歴史からいっても、この理念の根底にキリスト教的な考えが間違いなく存在している。Serviceは元々神を礼拝し、神と人に仕えることを意味している。しかし、アメリカの大学はヨーロッパとは違った発展をして、それがまたSPSの理念を独特のものにした。高等教育機関に国有地を払い下げたモリル法のお蔭で州立大学が作られるようになり、大学が大衆化していった。その州立大学はSPSが特異な拡大・展開を遂げた領域だった。しかしながら、1870年

にはハーバード大学でも、入学者の生活と学業全般に対して責任をもつ学長が任命された。また1889年に任命されたジョンズ・ホプキンス大学のジルマン総長は、多くの学生カウンセラーあるいは助言者の必要性を主張している。様々な大学で学生を援助するための責任者を任命するなど、受け入れた学生に対して、その成長・修学の成果に惜しめない援助と助言を与えるのが道徳的責任であると自覚してきていた。正にSPS運動が活発化したといえるだろう。しかしながら、この運動は当初アメリカにおいても多くの教育者から強い疑惑を抱かれ、甘やかしと過保護だという非難を受けたことは日本の現状を勘案しても興味深い。

戦後、民主化政策の一環としてアメリカの指導のもとで教育改革が行われ、学生の主体性に働きかけることによって、その人格形成を総合的に援助し、学生が共同社会の一員として必要な特質を身につけることができるようにすることを厚生補導の第一の目標として明示した。1958年の学徒厚生審議会答申「大学における厚生補導に関する組織およびその運営の改善について」によれば、厚生補導業務が次の13領域として示されている。

①入学者選考 ②オリエンテーション ③修学指導 ④課外活動 ⑤適応相談 ⑥記録・調査・テスト ⑦学寮の運営 ⑧奨学援護 ⑨厚生福祉 ⑩保健指導 ⑪職業指導 ⑫女子学生の世話 ⑬特別指導

これは、正課と図書館業務を除く、入学から卒業までの大学でのほとんどの業務を網羅している。50年を経た現在においても業務領域としては大きな変化は見られない。そして、SPSについては、アメリカと日本の精神風土の違いから日本にはなかなか根付かなかった理念であると考えられる。もちろん13業務とその内容については、学生も教職員も知らないものはないだろう。しかし、SPSという理念で、それらの業務を理解し、従事しているも

のも少ないのではないだろうか。特に学生の中には、それらが本来ひとつの理念に基づき、有機的な動きやサービスが執り行われることなど知るところではないだろう。提供している大学人でさえ、細分化されたその権限で小さくサービスを発しているのだから。

### 3. 2 厚生補導業務

戦後SPSが示されてからこんなにも社会・文化・経済全てが変わり、それに従い青年の気質も変わったと前章でいったばかりなのに、大学の学生課業務（厚生補導）は50年間も変わらなかったというのは、ひとつの奇跡といえるだろう。筆者の勤務する学生課でも、課職員たちはそれらの定型業務を、多少のためらいと共に「学生課」業務として消化しているに留まり、その無策が他大学でも叫ばれている「学生部（課）不要（無用）論」に発展しているといえるだろう。SPSは学生がおとなになるためのあらゆる援助を包含しているが、その活動は学生の成長のために障害となる事柄を除去するための援助のみならず、学生の成長発達をより促進する働きまでを含んでいる。学生の発達状況に応じて、その最高の発達を促すべく精一杯の対応をしていく姿勢こそ、教育機関の基本的な責務であるとするならば、大学教育の変革時にあたって、学生を中心に据え、「全人教育」を目指すSPSは再評価されなければならない。

そして、厚生補導業務自体も、学生の成長のために、陳腐化した業務を刷新し、SPSの原点に戻り、新たな「学生支援組織」を立ち上げ直す時が来たのである。自分の大学にいまどんな学生が集い、キャンパスで生活しているのかどれだけ把握しているだろうか。大学になくてはならない「学生」、職員がその「学生」のことをどれだけ知っているだろうか。それを知らずして、大学を運営できるものなのだろうか。時として、その大学運営や経営を独り善がりのご都合主義で動かしていないだろうか。最も「学生」の近くにいて、

生活を見聞きしていたはずの学生課が、「学生」を見ていて、現在の学生課、厚生補導部門を担っているといえるのだろうか。それぞれの大学にそれぞれのミッションがあり、それぞれの学生がいる。それぞれの教育があり、それぞれの理念や哲学がある。厚生補導業務、そして組織の問題である。

### 3. 3 厚生補導組織

「大学設置基準」の第42条（厚生補導の組織）に、「大学は、学生の厚生補導を行うため、専任の職員を置く適当な組織を設けるものとする。」とある。大学設置行政において、厚生補導組織を置かなければ大学は作れないというのである。大切な機能であり、部署のはずである。1990年代までは、筆者の勤務する文教大学でも、学生部長は筆頭部長であり、役職理事となっていた時代があった。背景には学生運動対策があったことは否めないが、現在でも大学執行部の重要なメンバーである。厚生補導業務の中心は、多くの場合学生部によって担われている。学生部の扱う仕事は、ファカルティを超えた、学生に関する諸事項全般にわたるため、大学における組織的位置づけは極めて重要と思われる。学生部の教員は委員会を組織し、学部間の連絡調整機能・学生部の助言機能・学生部の方針を審議・決定する役割を担う。教員の任期は短く、学生部業務の継続性は職員によって維持されているといつてよい。最近では、業務の専門化と細分化、ルーチン化が進んだため、大学によっては職員の事務部長や副部長を配置し、政策の継承と責任の所在を明確にする体制の整備に着手したところもある。いずれにしても、学生部は教員と職員のスタッフで構成されており、両者が良きパートナーシップを発揮することが、業務を遂行するには不可欠である。

厚生補導業務の領域や組織は、画一的なものでない。学生関係の業務は、学生部というひとつの部署だけでは担いきれない広がり

持っており、学生に関連する学内の諸機関と有機的な関係を持たなければならない。常に学生部は学生の問題を中心に据え、教育の全体的見地に立って、学内諸機関との調整機能を果たしつつ、適切なリーダーシップを発揮せねばならない。

学生状況の変化に伴い、今後、厚生補導業務の内容やそれを担う組織機構は、学生の多様なニーズに対応して変化、発展していくであろう。既にかんりの大学では、学生関係と就職関係を統合した組織（学生センター等）を発足させたり、業務の見直しによる既存業務の縮小や削減、新しい業務に対応したセクションの新設などの動きがある。厚生補導業務は、時代と社会の変化に対応して質的量的な変化が迫られているが、これらの一連の動きが、単なる合理化の一環としてでなく、真に学生一人ひとりの成長発達のための改革であることが今問われているといえる。

### 3. 4 S P Sと大学紛争

前章で「大学紛争」について言及したが、1960年も70年もそして現在でも、大学には学生部は存在し、S P Sは執り行われていたはずである。大学紛争のきっかけは、学費値上げ反対、セクトによるキャンパスのアジテーション化、大学運営の民主化要求といったものであった。学生運動はやはり大きな転機であり、「イデオロギーの崩壊」に象徴されるように、学生は集団的にも個としても内向化が顕著になっていった。本来はその時点での厚生補導の業務・組織について、具体的な方向転換や検討を実施されるべきだったと考えられる。学生に対する大切な業務検討を先送りしてきたツケを、これ以上先送りにすることは、大学の使命にとって重大な責任である。

「大学紛争」で、大学の管理性は拒否され、大学は自由な真理追求の場として開放されることが要求された。日本の大学の学生部はそれまで恒久的理念として培い規範としてきたS P Sを改めて認識すると同時に、具体的な

方法論や仕掛けを問い直す経験をしたと思えるのである。

大学紛争はS P Sを否定したのではなく、大学から提供される厚生補導業務の見直しのきっかけとなり、学生の新たなる自立の支援の機会を提案していたのだ。学生を見、常に進化し続けるのが、大学における厚生補導業務であり、組織なのである。

## 第4章 大学と学生の接点—取り組みと検討—

大学の厚生補導部門の教職員にとって、2000年6月に当時の文部省高等教育局から出された『大学における学生生活の充実方策について（報告）—学生の立場に立った大学づくりを目指して』（通称「廣中レポート」）の存在は大きい。日本私立大学連盟の学生会や、学生厚生補導研究会、学生部・課長会議等々の研究会において、その内容が取り沙汰され、各大学に何かしらの影響を飛び火させたといえるだろう。本編では、この章で活発な動きをした研究会等でのヒアリングと検討事項をレポート形式で紹介しているが、今回は割愛させていただく。

## 第5章 文教大学での理想的学生支援組織

「廣中レポート」を見て、狂喜乱舞した。それは、厚生補導に関わってきたものにとって、正に錦の御旗に思えた。「教員中心の大学」から「学生中心の大学」へというスローガンも学生課職員の筆者には至極当然のことではあったが、言葉にしていわれたことの少ないものだという実感も得た。文教大学での学生支援の改革のすべてがこの「廣中レポート」から始まった。

「学生部（課）不要（不用）論」が取り沙汰されるのは、当然ここ50年来その業務が見直されてこなかったことに起因する。また、教員が組織している学生部は近寄りがたく、教員・職員が手を携えながら動かしていくと



いった組織などでは有りえない。そして、危機管理的で非定型業務の中核をなす学生課は事務局という大学の管理的立場からいって疎まれる存在である。事務でありながら、厚生補導で教育的配慮を担い、「どっちつかずの蝙蝠」のような立場である。職員は、ゼネラリズムとスペシャリズムの間で右往左往している感がある。

50年間全く変わらなかったわけでもない。現在の事務組織となるために、SPSを分割して管轄していった末に、多少の合理化・リストラは行われてきたはずだと思われる。そして、その過程の中で、業務の取りこぼしや割愛はあったはずである。取りこぼしという意識はなくとも、不要ということで合理化し、現在は業務から消されているものもあるはずだ。すべてが必要だとは思わない。しかし、昨今、学生センターだ、統合化だと騒いでいるが、SPS・厚生補導業務のすべてを集結させて、点検し学生に必要と思われる業務の見直しと組織の再結成と、改めてSPSを再び大学に流布させ、定着させることが必要不可欠ではないかと思われる。

そのためにも、文教大学におけるSPSの実現化に向けた提案をするものである。まず、厚生補導業務の「すきま」を埋めるべく、これを拾い集めて、レスポンスのよい組織をつくる提案をしたい。というより、理想ではあるがそれが一番の解決法だと思い知っている。

これまで論じてきたように、かつて青年は「経済的な豊かさ」と「大学紛争」によって、その青年性が世代性に変質させられてしまっていることが分かってきた。ただ、その社会環境を一大学の取り組みとして、採用する訳にはいかない。そのためにSPSの理念をもう一度検討し、業務を構築しなおす必要性があるだろう。文教大学の独自性と目指すべき方向性をこれから提案する。

## 5. 1 文教大学の現状と行くべき場所

今回は割愛させていただく。

## 5. 2 文教大学への提案

別図として提案させていただく。

### 【引用文献・参考文献】

- ・西平直喜・吉川成司編著『自分さがしの青年心理学』北大路書房、2000.
- ・田口寛治『現代学生気質—敗戦・六〇年安保・大学紛争・「新人類」—』神戸新聞出版センター、1987.
- ・小谷敏『若者たちの変貌—世代をめぐる社会学的物語—』世界思想社、1998.

### 【参考文献】

- ・小此木啓吾『モラトリアム人間の時代』中央公論社、1978.
- ・高木正幸『全学連と全共闘』講談社現代新書、1985.
- ・溝上慎一編『大学生論—戦後大学生論の系譜をふまえて—』ナカニシヤ出版、2002.
- ・日本私立大学連盟編『私立大学のマネジメント [職員必携]』第一法規、1994.
- ・『学生助育—学生厚生補導研究会報告書—』日本私立大学連盟学生部会、2001.
- ・黒羽亮一『大学政策 改革への軌跡』玉川大学出版部、2002.
- ・大崎仁『大学改革1945～1999』有斐閣選書、1999.
- ・大崎仁編『「大学紛争」を語る』有信堂、1991.
- ・小林哲郎・高石恭子・杉原保史編著『大学生がカウンセリングを求めるとき—こころのキャンパスガイド』玉川大学出版部、ミネルヴァ書房、2000.
- ・日本私立大学連盟学生部『ユニバーサル化時代の私立大学—そのクライアントの期待と要望』、2000.
- ・黒羽亮一「2000年前後の大学改革の状況」『教育研究所紀要』9号、2000.

文教大学学園理事長 様

松本 和俊

### 学生支援に係わる組織の新設提案

大学に対する学生満足度を上げるとともに、現在の越谷校舎における教学業務の「すきま(niche)」をカバーする新たな組織(担当)の設置提案をさせていただく。

#### 職務分掌：学生支援係

「学生部」または新規の「学生支援センター」の下部組織と位置付ける。業務は「学生中心の大学」または「学生のためになる」業務をすべてカバーするものとし、既存の課の職務分掌に係る業務とは重複を避ける「すきま(niche)」的業務を拾い上げることを中心にすると同時に、事務局内のネットワークの「つなぎ(connection)」的位置付けとする。しかしながら、もともと学生課業務の延長上型の組織ということで、従来の学生課業務とは多少の重複を勘案していただきたい。

##### ①なんでも相談窓口（学生総合受付的機能）

学生に対する総合的・導入的な窓口対応を主たる業務とする。速やか、かつ適切に交通整理を実施する。また、その内容を担当部局等にフィードバックすることで、学内（学生⇄大学、事務局間）の共通理解・合意形成に資する。

##### ②新入生対応事務（フレッシュマンセンター的機能）

新入生に対するオリエンテーションを主催し、学生と大学とのネットワーク形成に資する。また、人間形成プログラムに取り組み、企画運営する。「大学での目標＝就職」ではなく、「＝充実した学生生活」のための仕掛けづくりを行う。

##### ③学生個人データ管理（学生データバンク的機能）

「文教大学及び文教大学女子短期大学部事務組織並びに事務分掌規程」で、入学課における第19条「入学者に係る追跡調査に関すること」を分掌する。入学から卒業までの学生データを一括管理する。

##### ④支援団体との窓口業務（外部協力団体連携的機能）

「文教大学父母と教職員の会」「文教大学藍蓼会」との連携を取りつつ、学生データの管理をする。外部2団体との窓口部署となる。

##### ⑤キャリア形成支援業務（人間力養成的機能）

学生生活を充実させるための低学年対象「プレイメントテスト」、「アセスメントテスト」等を実施し、キャリア・デザインに役立つ「仕掛け」の開発・運営を企画管理する。また、現在進行中の「ボランティア」「インターンシップ」の紹介管理を行う。

##### ⑥学生広報の企画編集業務（学生対象情報発信基地的機能）

学生への広報誌の統合と編集。必要に応じて学生特派員や学生編集員の採用を考える。

##### ⑦学内学生ボランティア人材バンク管理業務（学生ボランティア＝学生活用的機能）

学生がしたいというボランティア活動と、大学が必要としている労働力とを結びつける業務を担う。「アルバイト」ではなく「ボランティア」としての活用である。

##### ⑧学生支援に係る新規業務開発業務（新規事業開発的機能）

学生が望んでいることをルーチンとして、市民権を得られるように開発に取り組み、妥当な部署への配当に取り組む。

相談のり方も、知っていることを何でも一方的に教えるという形にはとられず、時には一緒に時間割を作ってみたり、ある課の苦情のようなものなら意見を聞き、ガスを抜いてあげると同時に、何故そのような対応だったか、学生には非がなかったかを悟らせるようなスタイルにすべきである。単なるインフォメーション・センターではなく、学生の人間的な成長のために常にケース・バイ・ケースな対応を心掛けたい。

以上